

ネコギギがつなぐ，人と地域 ～設楽ダム事業と地域保全の取り組み～

川村 健太¹

¹中部地方整備局 設楽ダム工事事務所 調査課 (〒441-2301愛知県北設楽郡設楽町田口字川原田1-2)

ネコギギは東海地方の限られた地域に生息する国の天然記念物であり，設楽ダム建設事業による生息環境への影響が懸念されている．そのため，設楽ダム工事事務所ではネコギギの保全活動を行っており，近年では地域保全の観点から地域住民と連携した取り組みを推進している．今回は，過年度に行った地域保全の取り組みを紹介し，今後の活動方針について考察する．

キーワード ネコギギ，設楽ダム建設事業，保全対策，地域保全

1. はじめに

ネコギギ(図-1)は，伊勢湾，三河湾に注ぐ河川の中流部のみに生息する日本固有種の魚類であり，1977年に国の天然記念物に指定されている．また，環境省レッドリスト2020(環境省第4次レッドリスト)¹⁾において，近い将来における野生での絶滅の危険性が高いとされる絶滅危惧IB類(EN)に定義されている．個体数減少の要因としては，河川の改修による生息場所の消失や近縁種のギギの侵入などが考えられている．

設楽ダム工事事務所では，設楽ダム建設事業に伴う環境保全措置の一環として，ネコギギの保全活動を行っている．また地域住民と協力した「ネコギギの地域保全」活動をきっかけに，地域が一体となり活性化していくことを目指し，地元高校や地元施設と連携した取り組みを実施している．

本論文では，「ネコギギがつなぐ，人と地域」というテーマのもと，2024年度に設楽ダム工事事務所が行った地域保全の取り組みについて報告する．また取り組みの効果と課題を踏まえた，これからの活動方針について述べる．

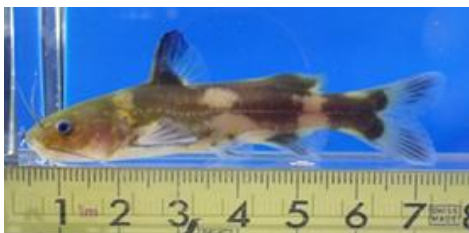


図-1 ネコギギ

2. ネコギギ保全対策

現在建設中の豊川水系設楽ダムにおいて，2007年6月に公告縦覧した豊川水系設楽ダム建設事業環境影響評価書の予測結果より，ダム建設がネコギギの生息環境に影響を与える可能性があると想定されている．実際に設楽ダム完成後の湛水予定地にはネコギギの生息する淵があることが過年度調査より確認されている．

設楽ダム工事事務所では現在，設楽ダム湛水域外へのネコギギの移植に向けて，移植実験及び生息環境整備の野外実験(環境改善)を行っている．これらの実験では，過去に行った生息状況調査・繁殖場調査結果を踏まえて実験放流淵の選定，環境改善手法の検討を行い，繁殖個体を実験放流することでネコギギの存続に必要な知見を積み上げている．

しかし，今後もネコギギが存続するためには，先に述べた活動に加えて地域住民の関与が不可欠である．設楽ダムの完成後，ネコギギの住む河川環境や生息状況の変化を捉えるには，「地域住民の目」による継続的かつ即応的なモニタリングが必要だと考える．また地域住民が一体となりネコギギという地域資源の保全活動を行うことは，設楽町の豊かな自然を守ることにつながり，地域の振興や発展に寄与すると考える．ネコギギの保全を持続可能なものとし，設楽町の活性化を推進するためにも，地域全体が関わる「地域保全」の視点を持つことは重要であるといえる．

3. 地域保全活動

設楽ダム工事事務所では、過年度より地域保全の取り組みを通したネコギギの啓発活動に取り組んでいる。設楽町の現状として、多くの住民がネコギギの存在やその希少性を十分認識しているとは言えず、ネコギギが地域に根付いているとはいえない状況にある。将来的にはネコギギの保全意義や文化的価値について地域住民が理解し、主体的な保全活動を通じてネコギギを地域の「文化」に昇華することが理想であり、目指すべき姿である。そのためには、ネコギギの保全に向けた仕組みづくりを促し、事業期間内に保全活動を軌道に乗せることが重要である。

以上を踏まえ、2024年度に以下の活動を行った。

- ・地元高校理科部のネコギギ学習
- ・地元小学校や地元施設でのネコギギ生態展示
- ・奥三河自然環境シンポジウムの開催

(1) 地元高校理科部のネコギギ学習

設楽町内に位置する田口高校において、2023年5月より理科部員を対象にネコギギ学習を実施している。高校生のような次世代を担う世代に、地元に住む天然記念物について知ってもらうことで、将来的に地域保全を先導するリーダーとなり、地元住民と共に保全活動を推進していくことを目標としている。

2024年度には年間を通したネコギギ学習を実施した。ネコギギの生態に関する学習会に始まり、繁殖場となる石組みの設置体験、給餌体験、高校内での飼育、河川への放流体験を行った（図-2）。一連の保全活動を体験してもらうことで理解度向上を図るとともに、将来的に地域で保全作業を行う際の課題の抽出を目的とした。高校飼育は9～10月の2ヶ月間にわたり生徒主体で給餌・水換え・観察を実施した。生徒は3匹の飼育個体に名前を付けて愛着を持って飼育しており、「3匹の成長を近くで見ることができてうれしかった」と語っていた。放流体験では高校にて飼育した個体を移植候補先の地域河川に放流することで、ネコギギだけでなく設楽町の自然環境についても関心を持ってもらうように図った。



図-2 田口高校理科部のネコギギ学習
(左：石組みの設置体験 右：放流体験)

また高校生にデザインを依頼し、ネコギギのぼりを作成した。作成したネコギギのぼりは設楽町の自然環境のシンボルとなるよう願いを込めて、地元道の駅にて展示を行っている（図-3）。



図-3 ネコギギのぼり

(2) 地元小学校や地元施設でのネコギギ生態展示

地元小学校3校（清嶺小学校、津具小学校、名倉小学校）にて各1週間のネコギギ生態展示を実施した（図-4）。高校生同様、ネコギギについて知ってもらうことで将来的に地域保全に携わってもらいたいと考え実施した。小学生からは「ネコギギがかわいかった」や「天然記念物という珍しい生き物だということを知った」などの声があり、ネコギギに興味を持ってもらうきっかけになったと考える（図-5）。また設楽ダムと共に生きていく地元小学生にダムとネコギギの結びつきについて理解してもらえるよう、設楽ダム建設とネコギギ保全の関係性についての説明を行った。これによりネコギギ学習を通じて設楽ダム建設についての認知も促した。

地元資料館や他機関主催の地元イベント時にも生態展示を実施し、一般の地域住民に対する保全活動の認知度向上を図った。イベントではカプセルトイを使用し、ネコギギの缶バッジを配布することで子供にも興味を持ってもらえるような工夫を施している。

2024年度には計7回の生態展示を行い、子供から大人まで多くの地域住民にネコギギを知ってもらう機会を創出した。



図-4 ネコギギを観察する小学生



図-5 小学生が描いたネコギギの絵

(3) 奥三河自然環境シンポジウムの開催

「ネコギギがつなぐ、人と地域」をキャッチフレーズに、2024年10月に「奥三河自然環境シンポジウム」を開催した(図-6)。設楽町内だけでなく、愛知県全体や伊勢湾流域でネコギギに関わる取り組みをしている有識者の講演を取り入れ、ネコギギをはじめとした奥三河の自然環境の保全について考えるきっかけとなることを目標とした。奥三河の郷土史や自然等のガイド役である「奥三河ふるさとガイド」やネコギギの飼育・調査を行っている「碧南海浜水族館」など多数の方にご講演いただき、三重県いなべ市にてネコギギの保全活動に取り組む「いなべ市教育委員会」などのパネリストを交えてパネルディスカッションを実施した。自然との付き合い方や地域資源としての自然の活用についてなどをテーマに、地域内外の多くの関係者から様々な意見が飛び交う場となった。また田口高校生よりネコギギ学習の活動報告及びネコギギのぼりのお披露目を行い、高校生の主体的な学習姿勢や、ネコギギの広報活動を通じた地域振興に注目・期待が集まった。併せて会場ではネコギギの生態展示やパネル展示を行い、環境保全の取り組みや他機関でのネコギギ飼育の取り組みを知ってもらう場を創出した。当日は報道機関3社の取材があったほか、総勢118名の来場者があり、多くの方に奥三河の自然環境の保全に関して考えていただくきっかけとなった。



図-6 奥三河自然環境シンポジウム

シンポジウム終了後にアンケートを実施し、シンポジウムや環境保全活動の印象・効果の把握を試みた。調査内容は下記の4項目である。

- ①シンポジウムで興味を持った内容
- ②シンポジウムの満足度
- ③環境保全に関する意識の変化
- ④今後の環境イベント等への参加

アンケートは45名の方に回答いただき、下記の結果となった。

- ①地元高校理科部の活動報告が31件と1番多く、次いで「奥三河ふるさとガイド」の講演が28件、「碧南海浜水族館」の講演とパネルディスカッションがそれぞれ27件であった(図-7)。
- ②全体の約87%が「大変満足」「満足」と回答した。
- ③全体の約84%が「非常に高まった」「高まった」と回

答した。

- ④全体の約96%が「参加したい」「予定があれば参加したい」と回答した。

全体的に前向きな評価が多く、地元高校生の保全活動にも期待が寄せられている一方で、「初心者向けで物足りなかった」や「ネコギギに関する具体的な情報が不足していた」などの意見も見られ、今後の課題となった。

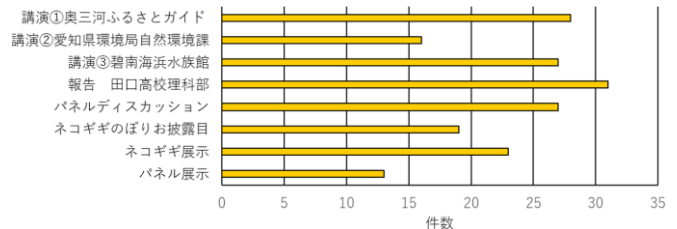


図-7 シンポジウムで興味を持った内容のアンケート調査結果

4. 課題

地域保全を進めてきた成果として、地域住民のネコギギに対する認知度は高くなったと感じられる。しかし設楽ダム工事事務所が目標としている、地域保全の活動を軌道に乗せるという点を達成するためには、ネコギギを知ってもらうだけでなく地域全体で保全していくという意識を持ってもらう必要がある。シンポジウムのアンケート結果も踏まえ、今後はこれまでよりも一段階進んだ内容を伝えることができるよう、学習内容の更新や実際に保全活動を体験してもらうなどの工夫を施す必要があると考える。

また目標達成のためには地域住民だけでなく、他機関との連携も重要である。設楽ダム工事事務所のネコギギ保全活動に指導・助言をいただいている「設楽ダム魚類検討会」の森誠一委員長からは、「地域住民、行政、研究者の三位一体のプラットフォームの構築が不可欠である(図-8)」という意見をいただいております。こうした3者が交流できるような仕組みづくりの構築が求められる。現状では十分に連携できていない部分もあり、将来的に継続性のある保全体制の構築のため、今後も地元イベント等への参加を促しつつ新たに連携できるような取り組みも検討していくところである。

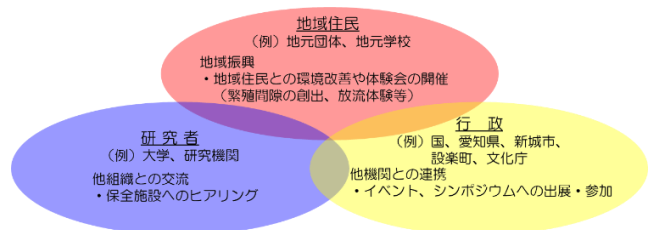


図-8 三位一体のプラットフォームのイメージ

5. 今後の地域保全活動

今年度は地元の田口小学校よりネコギギ学習の実施要望を踏まえ、田口高校理科部と合同での年間学習を計画し、給餌体験や学識者の講演会等を実施している（図-9）。高校生はこれまでの学習経験を小学生にわかりやすく伝えることで、自身の理解を深め主体的な学びを促進する。一方小学生は、高校生という身近な存在から学ぶことで、より効果的にネコギギへの興味・関心を高めることができる。またこのような世代間の交流は、知識の伝承のみならず、保全意識を世代間で共有し地域全体での継続的な保全につながると考える。

田口高校理科部では昨年度同様ネコギギの飼育を行うが、飼育期間を増やして年間を通した飼育に挑戦している（図-10）。季節ごとの行動や成長の様子、水温変化への対応など、短期間の飼育では把握しきれなかった内容を観察することで、ネコギギのより詳細な知識を深めることができると考える。次年度以降は高校での繁殖などより難しい内容にも挑戦できるよう方法を検討している。また田口高校では独自にネコギギTシャツ（図-11）等のグッズを作成し、地元道の駅での販売やInstagramでの発信を行っている。この活動をより多くの人に知ってもらえるような方法についても今後検討していく。

4章で挙げた実際に保全活動を体験できるような催しとして、繁殖場ユニットの設置体験を計画している。実際にネコギギが生息する河川に自分の手で繁殖場を整備することで保全意識の向上を図る。現状はまだ構想段階であるが、今年度に事務所職員で実験的に実施し、次年度以降高校生や地元住民に体験していただけるような機会の創出を検討している。

そのほかにも地元イベントに継続的に参加しつつ、昨年度開設した事務所YouTubeチャンネルやSNSの活用も検討することでより多くの人に向けた啓発を行っていく。



図-9 田口小学校・田口高校の合同学習



図-10 田口高校でのネコギギ飼育



図-11 ネコギギTシャツ

6. まとめ

今後もネコギギに対する保全意識の向上や地域保全のキーパーソン育成といった観点で、新たな取り組みを検討していくことが重要である。ネコギギが生息し続けることができる豊かな自然環境を守っていけるよう、地域住民や他機関と協力しながらネコギギの保全活動に取り組んでいく。また「ネコギギがつなぐ、人と地域」という視点のもと、地域保全活動をきっかけに人と地域のつながりを育み、設楽町の振興・活性化に寄与することを目指していく。

参考文献

- 1) 環境省レッドリスト2020